

主 題：身に着けるべき新しい人③

聖書箇所：コロサイ人への手紙 3章14節

テーマ：キリストによって新しくされた者は何を身に着けながら生きていくのか？

今朝も続けて学んでいきたいのは、コロサイ人への手紙3章のみことばです。きょうは先週触れることのできなかった14節と一緒に見てみたいと思います。

● “互いに愛し合うこと”

その前に、改めて一つの問いを考えてみてください。もし皆さんがクリスチャンを一言で言い表すとすれば、いったい何と表すでしょう。周りの人々はいったい何によって、この人はクリスチャンなのだと知るでしょうか？ある人は日曜日に教会に行くことを思い浮かべているかもしれませんが。ある人は聖書を知っていること、またある人は神様にあって喜びを見出しているのがクリスチャンなのだと答えるかもしれませんが。もちろんそれらもすべて非常に大切なものですが、イエス様ご自身がその答えを明白に教えてくれました。ヨハネ13：34－35に「：34 ……互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。：35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」とあります。人々は、いったい何によってその人がクリスチャンであることを知るのかというと、それは兄弟姉妹が互いに愛し合うことを通してでした。お互いの間に愛があるのなら、その愛を人々が目の当たりにするのなら、それによってすべての人々がキリストの弟子であることを認めるようになるということです。

かつてこの箇所に触れて、フランシス・シェイファーという信仰者も、このようなことばを残していました。「教会は、滅びゆく文化の中で、愛に満ちた教会でなくてはなりません。一体、どのようにしてその文化は私たちを判断するのでしょうか。イエスは言われます。『もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。』この世界、現在の滅びゆく文化にあって、イエスはある権利を世に与えておられます。ご自身の権威によって、私やあなたが新たにされたクリスチャンであるかどうかを、全てのクリスチャンに対する私たちの目に見える愛に基づいて、判断する権利を彼らに与えておられるのです。……言い換えれば、もし人々がやってきて、他の信仰者に愛を示さなかったという理由で、私たちがクリスチャンではないと判断を下したとしても、私たちはただ彼らがイエスから言われたことをしているに過ぎないと理解しなければなりません。怒ってはいけません。もし人々が『あなたはほかのクリスチャンを愛していない』と言うのなら、私たちは家に帰り、ひざまずいて、彼らが正しいかどうかを神に尋ねなければならないのです。そして、もし彼らの言う通りであるなら、それはその通りなのです。」。もちろん、ここでほかの信仰者に愛を示すということにおいて、私たちが一度でも失敗すれば、本当のクリスチャンではないと言われているのでも、必ずしもこの世の判断がいつも正しいと言っているのでもありません。でもポイントは明白でした。互いの間に愛があるのかないのか、それは世に対するはっきりとしたあかしになるということです。

私たちは、ことばでもって自分は救われています、キリストの弟子としてもう歩んでいますと口にすることは幾らでもできます。でもみことばは、その信仰に生きた愛というものが伴っているのかどうかを問うていました。だとすれば、果たして神様の愛をすでに受けたという私たちは、ほかの人を愛する者として周りから知られる、そんな信仰者でしょうか？もちろん愛を実践することに難しさを覚えたり、失敗したりすることはよくあります。それでもなお神様に対する私たちの愛と、また互いへの私たちの愛が弟子としてのあかし、特徴であるのであれば、さらにさらに愛において成長したいと願って生きる、そんなクリスチャンとして私たちは今を歩んでいるのでしょうか？きょう改めて一緒にみことばから考え

てみたいのは、この愛というものについてです。私たちはここ 2 週間にわたって 12－14 節の部分を学んできました。パウロはこの 12－13 節の部分で、キリストによって新しくされた者が身に着けるべき幾つかのものを挙げてくれていました。でも特に 12 節の頭をよく見ると、「それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として」と、パウロは言っていたのです。パウロは私たちに前提を教えてくれていました。私たちに基盤を教えてくれていました。私たちはもう神様によって選ばれた者として、神様によって救われ、聖なる、愛されている者と変えられた者として、今を生きていると。そしてそのようにして生きているのであれば、そのようにしてキリストによって新しく変えられたのであれば、ここですますキリストに似た態度を、ますますキリストに似たふるまいを示す者として、歩み続けていくことが必要なのだと、パウロは教えていたのです。具体的に、私たちは態度として、キリストのような深い同情心や慈愛や謙遜や柔和や寛容を身に着けていくことも、またふるまいとして、私たちが互いに忍び合い、赦し合う者として成長し続けていくことも、すべての信仰者にとって欠かすことのできないものなのだと見ました。新しくされた者にとって、それが当然の応答なのだとすることを考え続けてきたのです。

でもそれですべてではなく、態度とふるまいについて教えたパウロは、これらのものに加えて、私たちが決して欠かすことのできない重要なものを 14 節で最後に挙げてくれていました。そしてそれが愛でした。兄弟姉妹たちがほかの要素に加えて何よりも大切な愛というものを身に着けているようにとパウロは求めていたのです。

○身に着けるべき新しい人：すべての上に着ける“愛”の性質

ではいったいその愛というのはどのようなものなのでしょう？私たちはよく愛について学ぶことができます。私たちは愛について自分自身の足りなさを見せられ、責められることもあります。でも私たちがこうやってみことばで言う愛、愛と口にしていながら、みことばが教えてる愛についてどれだけ正しい理解を持っているでしょう。きょうはそのことを改めて考えてみましょう。新しくされた信仰者は、どのような愛によって特徴づけられるべきなのかを、みことばは教えてくれていました。特に 14 節のパウロのことばのうちに、愛に関して大きく二つの性質を見てみたいと思います。愛に関してパウロが教えていることです。ですから、もしまだこの中に、キリストにあるその愛を自分のこととして知らないという方がいるのであれば、是非きょう知ってください。もうすではっきりと示されたその愛のすばらしさをどうか自分のこととして考えてください。また、もうすでにその愛を受けて、新しくされたと言われる皆さんも、改めて自分がどれほど偉大な愛を神様から受けたのかに心を留めて見てください。そしてその上で、互いに愛し合う者として、ますますともに成長していきましょう。この時間がその助けと励ましになることを心から祈っています。

では、まずいつものようにみことばをお読みしますので、12－14 節を見てください。

コロサイ 3：12－14

「:12 それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。:13 互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。:14 これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」

1. 愛とは一番すぐれているもの 14 a 節

さて、まず一つ目に見て取れる愛の性質は、愛というのとは一番すぐれているものなのだとということです。14 節は「そして、これらすべての上に、愛を着けなさい」で始まっていました。言いかえると、これまでに見てきたもの、深い同情心や慈愛や謙遜や柔和、寛容や忍び合いや赦し合いといった、そのすべてのものの上に愛を身に着けるようにと言われていたのです。これは別にパウロが、ほかのものは要らないとないがしろにしているわけではありません。最後に挙げるものの重要性をただ強調していたのです。身に着け

ること、脱ぎ捨てること、そういう衣服のことを考えていますが、例えば日曜日のこの礼拝に、私がシャツとかパンツを身に着け、ネクタイを締めて靴を履いて講壇に現れたとします。でも、もしその時、ジャケットを羽織っていなかったら、皆さんはどう思うでしょう？あ、どこかに上衣を忘れてきたのかな、しっかりしてくださいよと思う人がいるかもしれません。でも、これは別にほかに着ているものが悪いという話ではないですよ？でもたとえほかのものをきちんと身にまとっていたとしても、上着を着ていなければ、その格好はまだ完成してはいない、十分ではないのです。そしてそれと同じように、パウロは信仰者たちが、同情心のシャツに袖を通して、謙遜のパンツを履き、赦し合いの靴を履いたのであれば、その上に最後、愛のコートを羽織るようにと求めていました。すべての上に最高の愛というものを着ることを求めていたのです。新しくされた者にとって、愛というのは、どんな時も、何をするにしてもなくてはならないもの、もっと言えば、すべてのことにおいて動機となるべきものでした。何よりも求めるべき一番すぐれたもの、それが愛でした。

別のみことばもこのように表していました。Ⅰコリント13:13に「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」と言います。愛というのは、私たちにとってどんな時でもなくてはならないものでした。でももちろんここで言っている愛というのは、現代の社会が考えているような単なる感情とか気分左右されるようなもののことではありません。ここであえて訳されていることばには、もともとギリシャ語の“アガペー”が用いられていました。要するに、これは単に感情で終わるものではなく、進んでだれかのために自分をささげる意思を持った犠牲的な愛を表していました。まるで母親が子どもを愛しているように、だれかのことを心の底から愛しているからこそ、その愛というのは感情でとどまるのではなく、自分をささげるという行為を伴って、相手に喜んで与えよう、仕えようとするのです。

マッカーサー先生もこの愛に関してこんなふうに述べていました。「他者に自身を捧げることは、アガペーの愛の典型です。聖書の愛は、誰かに対する喜ばしい感情や好意ではなく、その人の幸いのために自分を捧げることなのです。神の愛とは無条件の愛です。その愛は愛を示す相手の価値、魅力、その人の応答に左右されるのではなく、愛を示す人自身にかかっているのです。」と。つまり相手にかかわりなく、相手がどうであれ、たとえ大きな犠牲を払うことになったとしても、みずから与えることが、聖書が教えている愛というものでした。そんな愛を信仰者は例外なくすべての上に身に着けるようと言われていたのです。そして、これは私たちの歩みにとって余りにも大切なことでした。なぜかと言うと、ここまで私たちは12節、13節、14節と、新たにされた者が身に着けるべき態度やふるまいを見てきました。でもそうやって見てきた中で、正直こんなふうに思ったことはないですか？時に私たちは、互いに忍び合うことに難しさを覚えてしまうことがあります。みな罪や弱さを持っているからこそ、相手のしたことを赦すのが困難に思えることがあったり、大きな痛みを味わえば、その相手の前でへりくだったり、その相手に対して柔和な態度で接したくないという思いさえ浮かんできたりするかもしれません。私たちは、そのような弱さを持っています。では、もしそのような状況にあつて、私たちが自分の感情や気分、身を委ねて相手のことではなく、自分のことにのみとらわれれば、当然これまで見てきた態度やふるまいを示すことはできないでしょう。また、もし相手の最善を願うのではなく、ただ義務感だけに駆られて仕方なく、嫌々ながら慈愛や忍耐や同情心を示そうとしているのだとしたら、それは心の伴わない、ただ上辺だけの行いになってしまうのです。私たちのすべての動機には、いつも感情で終わらない、だれかのために進んで自分をささげようとする意思を持った犠牲的な愛が欠かせなかったのです。深い同情心を示すにしても、慈愛にしても、謙遜にしても、柔和にしても、寛容にしても、忍び合うことにしても、赦し合うことにしても、そのすべての動機には愛がなくてはなりませんでした。

そして私たちは愛をもってそのように振る舞おうとするのです。例えば、だれかによって傷つけられた時、今まで見てきたように、私たちは怒りで応答するのではないのです。その人を愛しているからこ

そ、その人の必要を満たしてあげようと、親切を示そうとするのです。だれかの過ちで悲しむようなとき、私たちは悪意によって心を支配されるのではありませんでした。私たちはその人を愛しているからこそ、その人に忍耐や柔和な心を示そうとするのです。だれかの罪によって苦しむような時、私たちはすぐにやり返そうとするのではありませんでした。私たちはその人のことを愛しているからこそ、その人が決して値しない赦しを示そうとするのです。こうして自分を喜んで与えようとする、そんなアガペーの愛というものこそ、私たちがまさに身に着けていなければならない最もすぐれたものだったのです。

そのような愛でもって、私たちは互いに愛し合いながら生きていくことが求められていました。だとすると、果たして私たち自身の歩みはこのような愛によって特徴づけられるものでしょうか？周りの人たちは、私たちを見て、このような愛を私たちのうちに見るでしょうか？一つ言えることは、心を騒がすような難しい問題がだれかによってもたらされた、その時こそ私たちが本当の愛を持っているかどうかはわかるのです。なぜなら、自分に優しくしてくれる人に優しさを示すことは容易にできます。自分のささげた犠牲に対して、同じように返してくれる人に対しては、喜んで犠牲を払おうとします。でもここで問われていた、アガペーの愛というのは、自分によくしてくれる人や、自分に都合のよい時だけではなくて、たとえ自分にとって都合の悪い時であっても、自分にとって都合の悪い相手にさえも示すものでした。イエス様も同じ“アガペー”ということばを用いて、マタイ5：44、46で「：44 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」「：46 自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。」と口にしていました。自分にとって都合のよい時ではなくて、私たちは自分の思いどおりにならないような時に、だれかが自分の気に入らないようなことをする時に、果たしてどのように応答しているでしょう？家庭において、夫や妻、親や子どもが自分の怒りや不満を引き起こすようなことをした場合、それにどのように応答しようとしているでしょう？教会において、周りの兄弟姉妹が気分を害するようなことをした場合、私たちはどのように応答しようとしているでしょう？私たちの応答を人々が見る時に、慈愛や寛容を見て取ることができるでしょうか？人々がそのことばやふるまいを見る時に、そこに同情心や忍び合うということを見て取ることができるでしょうか？それとも愛に基づかない、ただ感情や口先だけのものを見て取るのでしょうか？

聖書は、はっきりと言っていました。どんな愛を私たちが身に着けるのか、ここで書かれていたのは、アガペーの愛でした。私たちが勝手に考えるような愛ではなかったのです。私たちの歩みは、アガペーの愛によって特徴づけられる歩みでしょうか？確実に言えるのは、私自身もまた皆さんも、この愛という点において、今もなお成長しなければならない点がたくさんあるということです。このように愛を実践するのは自分には難しい、余りにも厳し過ぎると思う人がいるのであれば、改めて思い出してください。そもそも私たちがこのような愛を実践できる唯一の理由、それはすでに私たちが愛である神様から、その愛をただ受けたからでした。私たちが神様からその愛を受けたのであれば、知ったのであれば、私たちはこのようにして生きていくことができる者へと変えられているということです。もしこの愛というものが、ここで互いに愛し合うための愛というのが、私たち自身の力や意思にのみ求められるのであれば、私たちには到底できないことでした。私たちがいつも自分を捨てて相手を思うという愛は、私たち自身のうちにはなかったのです。でも、もし私たちがキリストを信じ、恵みによって救われ、愛である神様から新しく生まれたのであれば、神様から受けた御霊の愛でもって、お互いの間で生きていくことができる者へと変えられたということです。ガラテヤ5：22に御霊の実について書いていましたけれども、最初に挙げられていたものは愛、アガペーの愛でした。私たちがイエス・キリストを信じたのであれば、私たちのうちに御霊が与えられて、その御霊は私たちに愛を生み出してくれるのです。私たちはもう既にその愛を受けたということです。

私たちが愛を示すことができるのは、私たちがまず愛を受けたからです。この真理をヨハネも繰り返し、自分自身の手紙の中で教え続けていました。例えばⅠヨハネ3：16に「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」と書いています。それなら兄弟のためにいのちを捨てるべきなのだと。Ⅰヨハネ4：10-11にも「:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。:11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。」と書いていました。神がこれほどまでに愛してくださったのであるなら、私たちも互いに愛するのだと。そして最後にⅠヨハネ4：19にも「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」と書いていました。もしこれが反対だったら、私たちにとっては大変なことでした。神様が、私たちを愛してくださるために、まず私たちが頑張って互いを愛し合ひましょう、それだったら私たちに到底果たすことのできない、完璧すぎる基準でした。でも、私たちが互いを愛し合うのは、神がまず私たちを愛してくださったからだったのです。ですから、もし私たちが兄弟姉妹のだれかを愛することに難しさを感じるのであれば、自分にはこの人を愛することはできないと訴えるのであれば、まさにそのとおりです。私たちにはできません。でも愛である神様を本当に知って、私たちのうちにキリストがともにいて、今も生きているのであれば、私たちはもう自分が受けた愛でもって、私たちに与えられたその愛でもって、互いに愛を示すことができる者へと造り変えられたと言うのです。それが、神様がなしてくださったわざでした。

コロサイ3：12の一番初めに「神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として」と書いてありましたよね？もう愛されている者として歩んでいるのだとすれば、その受けた愛を示していきなさいと。では、私たちはいったいどんな愛を受けたのでしょうか？私たちの受けた愛、その神様の愛というのは、果たして周りの状況や相手に基づくものだったのでしょうか？いや、そうではありませんでした。神様が私たちのことを見て、私たちのうちに神様の愛に値する何かを見出したから、愛を示しましょうというものだったのでしょうか？そうでもありませんでした。ローマ5：6-8に、はっきりと教えてくれていました。そこに「:6 私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。:7 正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」と書いていました。これを見てもわかるように、神様の愛は私たちがそれに値したから与えられたものではいっさいありませんでした。私たちは弱く、不敬虔な者として歩んでいました。私たちは罪人だったのです。このような者のために、王であり主権者であられるイエス・キリストがへりくだって、十字架の上でいのちをささげる。私たちに、それに値する要素はいっさいありませんでした。私たちは生まれながらに神様の前を不敬虔なものとして、ただ頑なに、神様の忌み嫌われる悪や罪を行うことに喜びを見出し、本来神様のために生きていくべきなのに、自分自身のために生きていくことを喜んでなし続けていました。

神様に逆らい続けていた罪深い私たちにとってふさわしかったのは、ただ神様の正しいさばきでしかなかったのです。神様が私たちに値するものを与えたのだとすれば、私たちに値したのは永遠のさばきでしかありませんでした。みずからの意思で神様に逆らい続けている敵として歩んでいたその時に、ほかのだれでもない神様が私たちに愛を示してくださったと言うのです。ひとり子であるイエス・キリストを与えることを通して、ご自身の愛を神様が明らかにしてくださいました。感謝だと思いませんか？いつでも喜べると思いませんか？もし神様が私たちに本来値するものを与えようとしたら、私たちにはいっさいの希望などなかったのです。神様の愛が相手に基づくものであったら、私たちに基づくものであったら、私たちは何の希望もなかったのです。ただ、罪のゆえ、永遠の滅びだけがふさわしいものでした。でも、神様の愛は、私たちに基づくものではなく、神様ご自身に基づくものでした。神様はご自身の愛と

いう性質に基づいて、その偉大な愛を私たちに示してくださったのです。私たちがよい行いをしたから、それに基づいて与えられたものでもありませんでした。そうやって考える時に、私たちは測り知れないほどのアガペーの愛を受けたのです。そしてそれを私たちが受けたのであれば、それを私たちが知ったのであれば、その愛が私たちのうちに与えられているのであれば、私たちが互いに愛し合う時に示す愛も、相手や状況によって左右されるものであってはならないということです。

自分のこととして考えてみましょう。このアガペーの愛を例えば夫婦関係に当てはめて考えてみてください。兄弟姉妹との関係に当てはめて考えてみてください。家族との関係に当てはめて考えてみてください。私たちはこれまでもいろいろな場面で、腹を立てることがありました。小さなことで争いが生じることもあったでしょうし、相手のしたことにとらわれて、優しさや忍耐を示すのに躊躇や、拒絶を覚えるようなこともあったでしょう。でも、そのような時に、私たちが神様の愛を覚えるのであれば、私たちは相手がどうであれ、みずから愛を示そうとするのです。相手が自分の愛に値するかどうか、それが、私たちが愛を示す基準ではありません。神様が値しない愛を私たちに与えてくださったという、それが私たちの基準です。神様が値しない私たちを扱ってくださったから、その扱われたとおりに私たちも同じように愛を示そうとするのです。それが新しく造り変えられた者の生き方でした。それがもう愛されている者としての生き方でした。神様の愛を知ったから、そのようにして生きていこうとするのです。果たしてそんな愛をどれほど日々示そうと歩み続けているのでしょうか？私たちの示している愛は、愛を示す相手や状況にいつもずっと左右され続けているものなのでしょうか？それとも私たちがすでに受けた神様の愛に基づいて、私たちがみずから与えようとする愛において成長し続けているのでしょうか？私たちは神様がキリストを通して、みずから進んで与えてくださった犠牲的な愛によって救われました。この方を知って、この方を信じたその信仰によって、恵みによって、その愛を知ったからこそ、今私たちも同じものを示そうとするのです。値しないものを受けたから、愛をもって私たちもそれを示そうとします。それこそが新しくされた者として私たちが身に着けているべき、身に着けようと願う一番すぐれている最高の愛でした。

2. 愛とは結びの帯となるもの 14b 節

次に、二つ目に見て取れる愛の性質は、愛とは結びの帯となるものだということです。14 節の続きを見ると、「**愛は結びの帯として完全なものです。**」と書いていました。ここで用いられていた「**結びの帯**」ということばには、「何かと何かをつなぎとめるもの」とか、「いろいろなものを結束させるもの」といった意味が含まれています。つまり愛は最もすぐれたものであるだけではなくて、兄弟姉妹を一つのものとして強く結びつける重要な帯としての役割があるということです。その帯が愛なのだというのです。ある注解者もこんなふうに述べていました。「愛は、信仰者の人生において最も重要な道徳的資質であり、教会に一致を生み出す接着剤そのものである。」と。今まで私たちは一致というものを見てきました。この一致というものが、当時の教会においても、また今の私たちにとっても欠かせないものだということとは、もう何度も見てきました。みことばはそのことを繰り返し教えてくれていました。

例えばパウロもエペソ 4 : 3 - 6 に「3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。 4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。6 すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。」と口にしていました。「御霊の一致を熱心に保ちなさい」と、パウロは言っていました。また、そこだけではなく、分裂や不一致といったさまざまな問題を数多く抱えていたコリントの兄弟姉妹に対しても、パウロは仲間割れをするのではなくて、一つの群れとして一致を保っていくことを真っ先に求めていました。I コリント 1 : 10 で、パウロは挨拶をしたすぐ後に、こういうことばを続けています。「さて、兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって、あなたがたにお願いします。どうか、みな一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保

ってください。」と。パウロは、同じ一つのキリストによって、同じ一つの信仰によって、同じ一つのからだに属する者として変えられた者たちが一つのもので生きていくということが、どれだけ大切なものなのかをよくわかっていたのです。でも同時に、そこには当然困難が伴いました。教会が実際に一致を目指していこうとするのであれば、その上でさまざまな難しさも存在していたのです。思い返してみれば、この当時の社会において、もともといろいろな違いが原因で、人々の間には大きな壁が存在していました。どんな壁かというと、ギリシャ人やユダヤ人といった大きな壁もありました。人種の違いや宗教の違いというものが存在していたのです。ほかにもいろいろありました。性別の違いも、文化の違いも、育った環境や社会的な立場といった違いもありました。そして、そういったいろいろな違いが人々の間に対立や争いを絶えず生み出していました。でもそのようにして、いろいろな違いによって争っていた者たちが、かつてそうやっていたがみ合い、争い続けていた者たちが、今はキリストによって救われて、同じキリストのからだに属する一つのものへと変えられたのです。

ガラテヤ3：28にも「ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」と書いていました。かつて人々を隔てていた壁は、キリスト・イエスにあって取り壊されました。キリストにあって一つになったのです。では想像してみてください。そのようにして変えられた人々が今度はともに集まるのです。かつていろいろなことで違いがあった人たちがともに集まって礼拝をし、祈りをし、ともに仕えようとするのです。もしそのような教会に自分を喜んで犠牲にする愛がなかったとしたら、どうなるでしょう？もし人々が自分のことにだけとらわれて、ほかの人に仕えることを拒む、そのような愛がなかったとしたらどうなるでしょう？容易に想像がつくように、そんな教会は絶え間なく争いが起こり、分裂してバラバラになってしまうでしょう。だから教会には、人々を一つとする接着剤が必要でした。一つとされた者たちが一つのもので歩み続けていく上で、それを強く保ち続ける帯が必要だったのです。その帯が愛だと言うのです。愛こそがいろいろな違いを持っている兄弟姉妹たちをますます強く結びつける結びの帯として必要不可欠なものでした。

そしてこれは、今の私たちにとっても同じです。私たちが信仰生活を歩んで行く時に、私たちが同じようにして、キリストにあって救われた者たちとともに歩んでいこうとする時に、私たちにもこの愛の結びの帯というものは絶対に欠かせないのです。なぜなら私たちが今、周りを見渡した時に、私たちもいろいろな違いがあります。男性と女性の違いもあります。年齢の違いもあります。育ってきた環境も違いますし、話すことばも違うかもしれません。私たちの間にはいろいろな違いがあります。そんな私たちがもし自分だけのことを考えて、ほかの人に仕えようとしなかったら、私たちのうちに愛がなかったとしたら、私たちのうちにも分裂が出てくるのです。だからこそ、私たちにとっても私たちを結びつける愛という接着剤は欠かせないものでした。私たちが互いに愛を示し続けることが大切だったのです。では、私たちはそのような愛をもって、今、実際に歩んでいるのでしょうか？先ほど見たアガペーの愛をもって、私たちが神様であって一つとされることをますます願って、自分ではなく、相手の益のために犠牲を払って仕えようとしているのでしょうか？この先、私たちが続けて多くの兄弟姉妹とともに歩み続けていけば、それぞれのうちに違いがあるからこそ、すれ違いや争いも生まれてくることもあるでしょう。私たち自身が罪の性質を持っている以上、私たちが高慢になって、自分の思いや考えを優先させたいという誘惑に駆られて、自分とは合わないような人たちとは関わらないようにしたいという誘惑も出てくるかもしれません。お互いの間において愛を実践することが難しいと思うこともあるでしょう。そんな時こそ、私たちは思い出し続けることです。キリストがどんな愛を私たちに示してくださったのかです。私たちがあの十字架にあって、神様からどんな愛を受けたのかということです。私たちが十字架を見上げる時、そこに愛を見ることが出来ます。ただ、ほめたたえられるべき神の御子は、人々からののしられ、蔑まれながら十字架の上で苦しみました。罪に対して、燃え上がる神様の御怒りのさばきを代わりに受けて、ご

自身のいのちをささげてくださったのです。本来であれば、それらはすべて私やあなたが受けるべきものでした。私たちに値したものでした。でもそんな私たちの代わりにご自身をささげてくださったこの救い主は、その大きなあわれみのゆえにみずから犠牲を払って愛を示してくださったのです。先に見たⅠヨハネ3：16に「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」と書いていました。もしまだこのキリストのその愛を知らないという方がいるのであれば、きょう知ってください。きょう、この方の助けを求めてください。神様に逆らって歩み続ける罪深い生き方をし続けるのではなく、この方に立ち返って、この方の救いを求めてください。イエス・キリストを自分の救い主として信じ、主として従って歩み続けてください。この方にのみ救いがあります。この方のあわれみを求めてください。

私たちがこうして救われた者として歩んで行く時に、いつも覚え続けることができます。私たちの愛する主は、実際にご自身をいけにえとしてささげてくださいました。そんな偉大な愛を受けた私たちは、その愛に心を留めて喜んでお互いに愛し合っていこうとするのです。イエス様が言われていました。「:34 ……互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

(ヨハネ3：34－35)と。でもこうして見てきて、まさにそのとおりだと思います。かつて私たちはそのような愛はいっさい持っていませんでしたし、知りもしませんでした。でもそんな私たちが神様によって変えられ、新しく造り変えられ、そして私たちが互いの間において深い同情心を、慈愛を、謙遜を、柔和を、寛容を、忍び合うことを、赦し合うことを身に着け、そしてその上に何よりも愛というものを身に着けるのだとすれば、そんな生き方は間違いなくこの世が決して見たこともない、この世が決して知らないキリストの弟子としての歩みになるでしょう。感謝なことに、私たちはキリストの愛によってもうすでに救われ、新しくされました。私たちは新しくされた者として、神様の助けを祈り求めながらみことばに従って歩んでいくことができます。私たちに必要なものはもう与えられました。だとすれば、ともにこのすばらしい愛を現す者として、まず何よりも心から神様を愛し、そして互いにその同じ愛を実践しながら、ますます神様の栄光を現す者として成長していきましょう。